浦里時次郎　明為後正夢巻之十二

南仙笑楚満人　合作

江戸　瀧亭鯉丈

第四

却説正左ヱ門其夜さりの危き場所を折柴に来り合せ蝶五郎に捕らるゝを思ひ誘ひ一トまづ油屋へ立戻り多ゞよりの娘宋衣を世上へ出さうとゝ。

蝶五郎より別に。昭と共に次の日船橋の彈と長吸
き。呼て。撿見川まで来よ。も、鳴ち病氣もげくと
の人比程よりのひづうのまや持病の癪氣ふて紙代
きけ上ば。いうぶ せんと 途方にくれ。幸ろ長ま
ろうの一軒の酒屋のありけ上ば 宝に入て。ぐらく労と
と体あらう 比酒屋の店より居ば近辺の男 一人の馬士
二三人車屋より乗て酒のまるまとれば 王
うのあぐ。あらくあんがいのくるよんべ。うんざ。あとり
でうの鉢イぶうきうそそ。ふぐ酒でも

かうぐ名の世ア三ア三ア三

をのぶろぐ
を盗人の時次郎といふ人もうろ
ぶ。そうちの方へうろ
ぶらうろつくこそべいからあ捕てもしくうかうむの
金ハ望次郎のまくこもんうくそもあるをを急
度食るにヤ付るときびしく言つうるこイべく
ちくしぢやア移へ曲るくそのきくそ曲支よゆ
つけるとの支ぐ「ハテ」そふてそのそ室物ハ何と
りへものぐナ・「そ室よりそ室物の名ハ何とも
りうけ。待よりうぐよ。よりて何でも其那寺の

お侍様方の御家来衆
るし説法でみ〜建立でこそ
化く。その内くどんけの一神と
いふ度その盗ず奴とつくもの
言分てあく出世きびよの
あっとこそ眼あア
きるらべ必ぬるらあやうる
点ぶく。迷分おのくもも
ほけて。ナア八

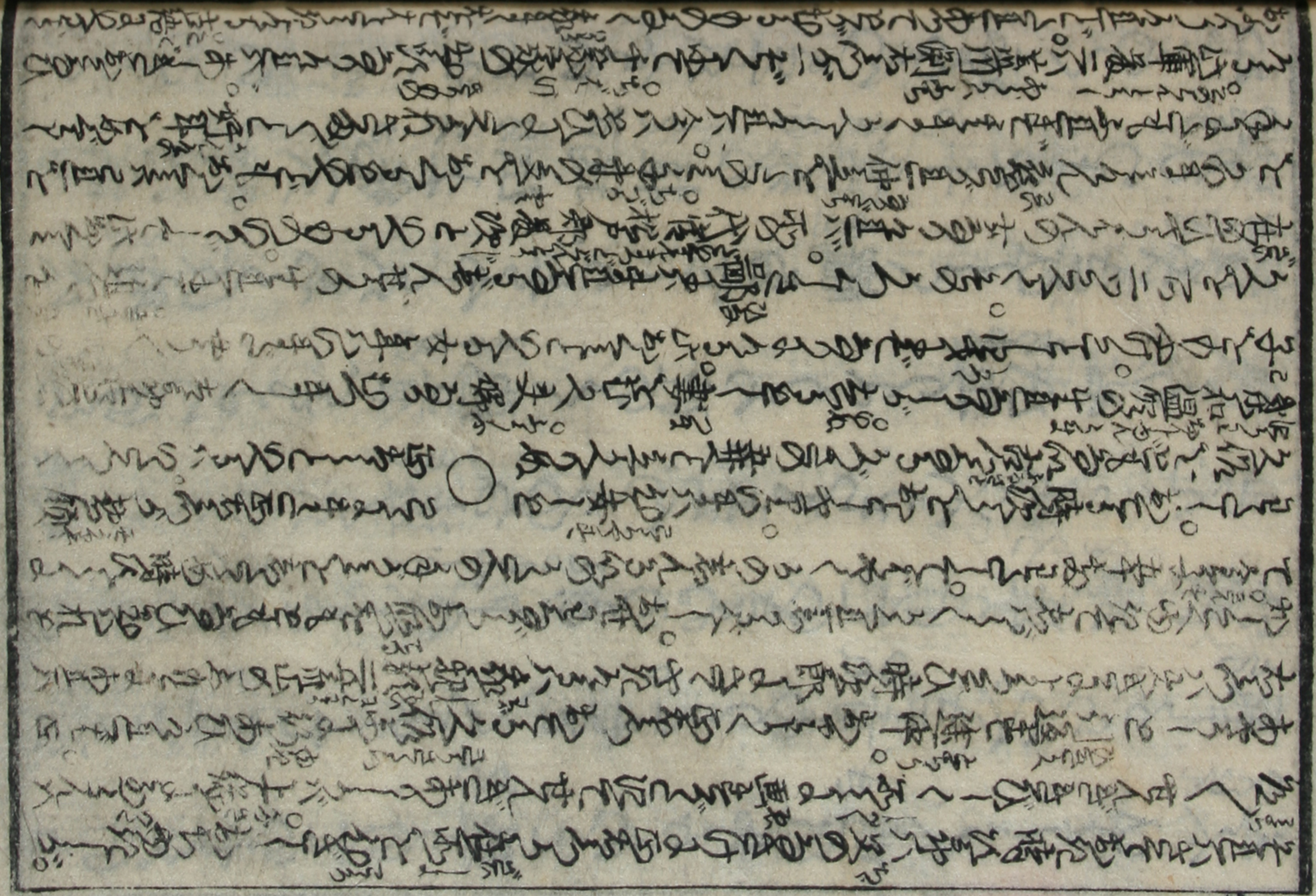
の旅人よ。きちらゑと。はて。そもの盗賊の時次郎と
やらとつうよふよ。あるよ。ゝ。ダガ。當時千葉
家とのうちやア。鎌倉の。一ツ門で。法度だやう
並べ。ものゑ。ぬ。威勢。さ。くどゝよかゑとも
きづく。出。ゝゝまゝくく内。「ゑ」ゝゝくどゝよろて
人にさゝへゝ。ゝ。あうち。かうどゝゝゑと
陸ゝもぬゝ。ゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

久兵衛「こてこて度々若旦那西太郎さまの用事ばかりあるやどよ。この手紙と親父さまのおくへあつて行つてこと長やり弁かうの雑くまを目覚さるへあるこたづれて参りまさと道でごぎりますよ魚うまこと。

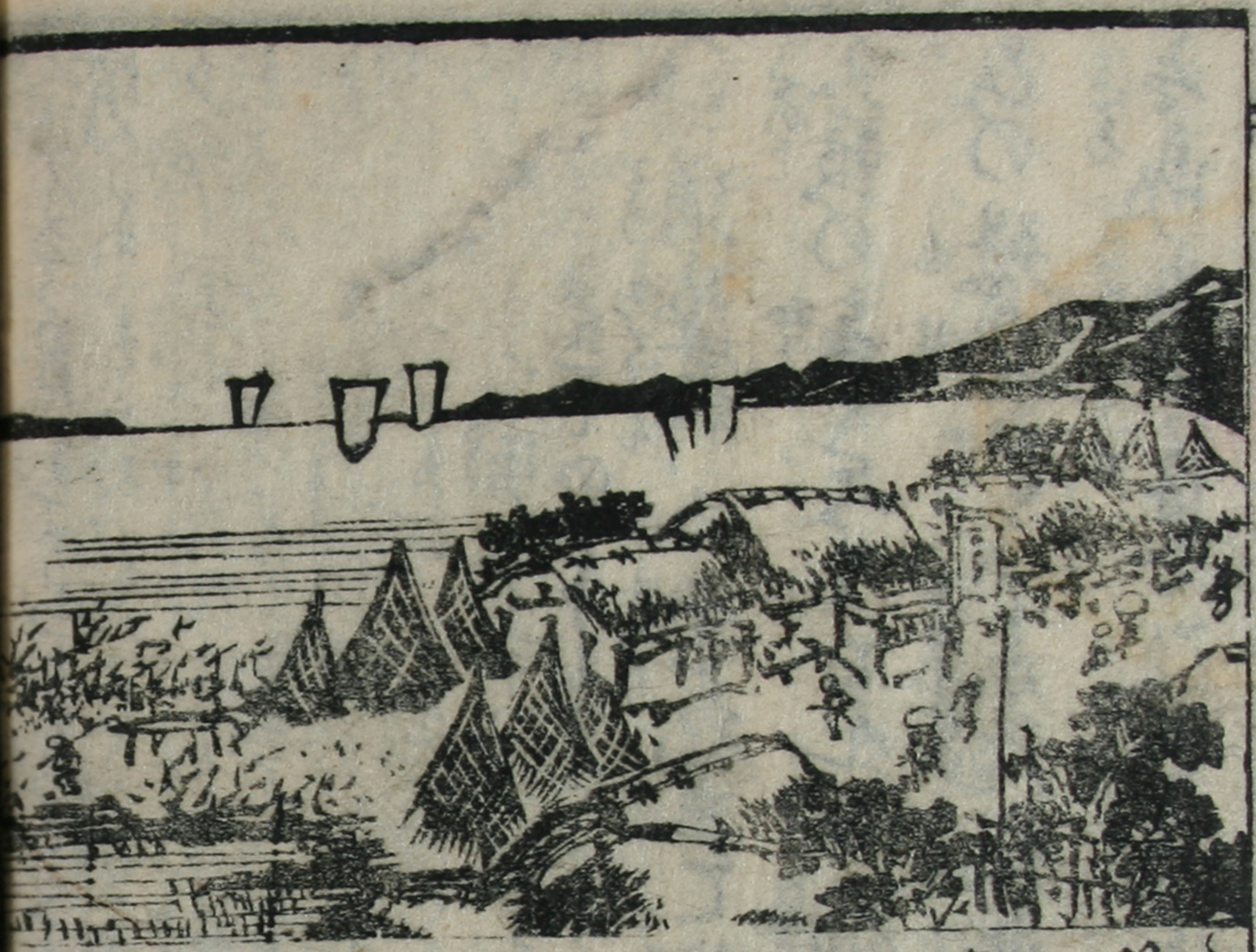
ヲくお照さまよりうお嬢者でありでさうごぎり弁とかくくく悦び西太郎が。手紙と出と渡とる

とゝや遂に封切切繙もその文言の○なのみならず菅家の
ゆゑあるゝ事ゝ上ひまに時次郎どの支度
ものぐ
了袖とあくまの盗賊のよくもくせに
よくもくもくへきと京ゝまおあるくへきと京ゝまおあるくへ
ものくもくへきと京ゝまおあるくへ
はくも

ゆどうく近くつきて八人の馬士ども
勢ひつよき千葉家の権柄比上総へ時次郎
絵巻きびしく觸る。そもそも時次
郎の中間返りうろたえのく悪者どもつけら
まん。ところのものうちも来づ
うろうる遠くへ逃げ時
次郎跡追うけてのきあのるの中後ども上ふまと。
取まろらぐき上有りと。そもくよとて
見れば
三人ひとーーく時ひ鼻ぐまあと追うけてのとどけう



人盛りんるうちに夫婦でくるうとうぐるうあやまりの
悪人くるあらうまでとこのくどもいろうるう宿屋やまあ
きうとをしたまうろの最とう夫
きうくをしたるうしたるうるう。道ふとるり
えるうくるうるうるう



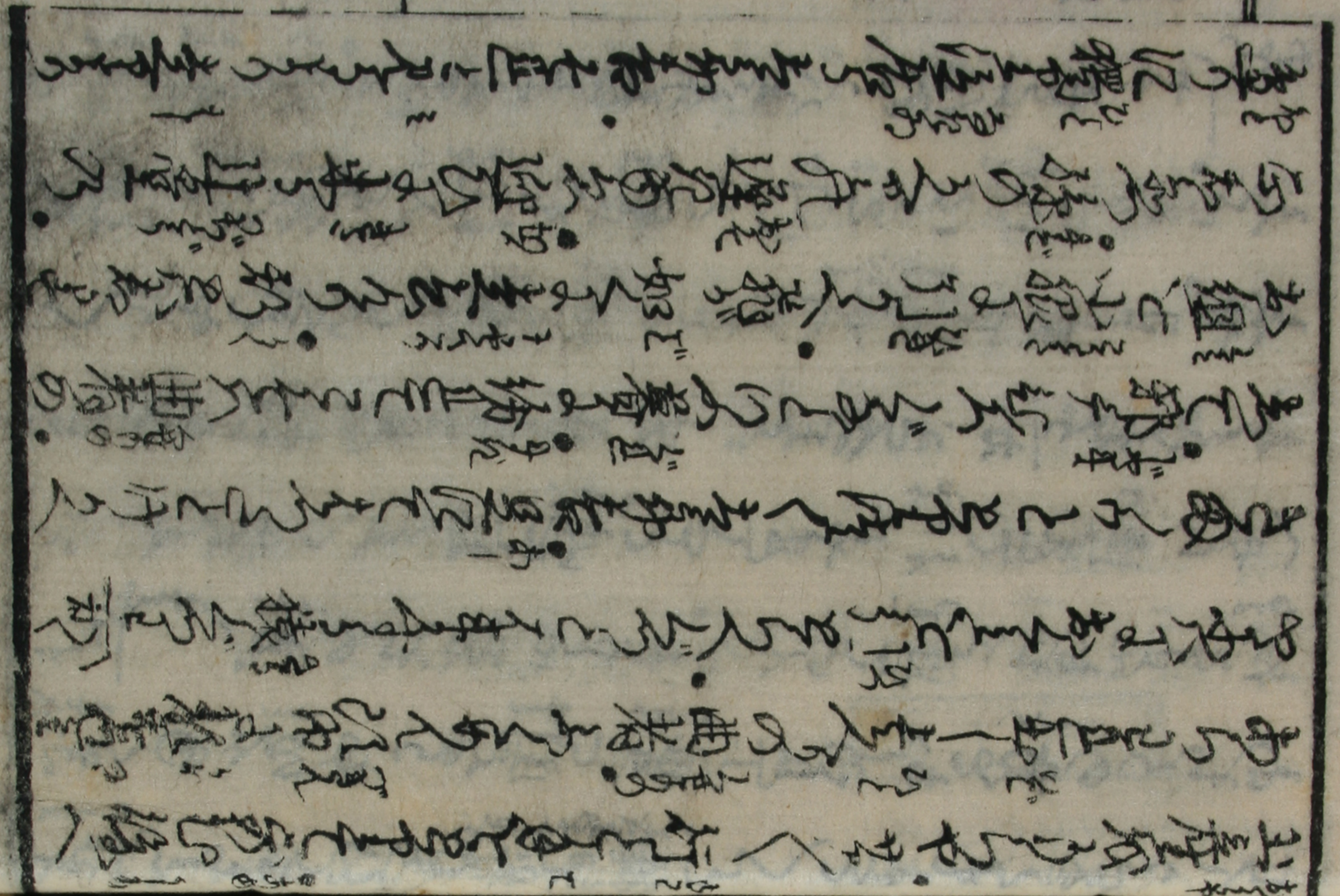
こゝ〳〵
美濃どの

ころきち
こゝ〳〵
参る

そのようなものでは我ら
けが
ちゝ
ちゝ
やんなる。○ゆゑ迷の答イ
けが
の間寺に初よろこ様ぢす
ろくに
あて見重郎
きる
ぢうくら
見
ゆくゆく
あやうて氏毎ぢ
ころころ
あら
の上言紙ぢ
ころころ
みなとなるト
ゆぢ参郎書
おとなく
太郎吉
アイそんるら

あるへてぐ
かきあもちゃんちゃやいのとあ
下さまと海
ぬのうとの顔
海ぐ「りゃ
とこ
ぐもらば
已間へば
あまと
間まハちゃ

あるへてぐ海よちまゃ・トおと
ぐまと海よちまゃ
放ぐよ早ハ爺
ぐ
ハ爺方ハよ海
ぐ
ハ爺
ぐ
ハ
ぐ
ハ
ぐ
ハ



「やあ、そこに居なるは、嫁か。婆か。
あるまじ。嫁か婆か。と問へば、是も法へ入る雅楽コレ嬰
ぢや。コリヤ、ぢや。嫁女へどこよ何方にとこ入ぎやうく
ぢやの。「カ」きあまをぢ。ちきあまをぢ。あるまじ。
へあら連れて行くと。嫁。婆。おがくく正者ちやの。
何ごとぞ。あぢ連ていんぢ。どちの方へ。
あまちの方とか。雲と聞ちおぼがの。
せんうとるくと。雅兒賀爾入て西者ちの一覽

其家八立かへる

廿一田

世の中もいつぐ常なる飛鳥川昨日は変る正あるつぐ。
家八火宅は見るもものぶ世は塵土の住居物も
はぐく花鳥の餌つくづくとくらうぐ玉の園でも
鎌倉とうり戻りまる正直命家家ぐらうも世と
老母
老母の家へさてあしきて外面よりさぐぐ肉の孫子
とうろぐるぐ孝母の家とあがくしてヤレく嫁女

ぞ、とてもやうこうぞや道陸神の祭りの夜、代
ちまちまちとともすものをそなへきやうこが餅をかへ
遅の男、都合ぐがぐ逆ひよりよりとふ社堂の辺り
にて太郎吉ぐが獨り泣てゐるを連て戻りく柏子を
呼ぐ。ぐこうぐ叔父ぐ。もちまちまちと陸奥ぐ
ふぐだうり。委細のるぐ。ゐるれば近所の人をあ頼
みて。そこよりよりと異てもぎくまぎらこを
の形象、神隠ハ世よぐ神隠ぐらそぐ自ぐ

引に逢てこゝのもとにて爺どもと二人り
ありて泣いろ孫とぶ〳〵きろ〳〵潮くまを教と明せよ。
ちのぐぎ　あさ　ぶ　ぐ　ぐ　ぐ

ぢうくと。ぢくぐまそてあるびさうと。ぢくぐまそてあるびさうと。

ふくまきてかんくくとつまぎさせど。乳がでぬ。

あくくくとあぶす顔どもとさへ胸もきくく憂

嘆かて世がら子の親よ男の美面容も

人なきぐ立てこと立立べ乳やあのとぐ身んな

かうる時節よ生立食ぶ仕子の不宜ろ私が業らと。

ちうの人ぐ氏家が恨めくくもち生きべ船多の昔の

ひとりとと人の壁人の通り。アノ一叶年の大頭よ乳んで表の

九拍手ばかり会釈のうち九度拍手とは
却が才のうへ。是甚だうくやと千年万年
ぞこいそる。よろこぶ。ふたうどうく下きたて
今日が日まで何ほどとてのやまやまとて覚を
ちくさん人間とこそ。スリヤアノ兼きるも代者ホ人
聖て初まりしろ。日蝕ろる邪非道侵房石無人の
軍義次ぬ。あらはさまよ。義墓て兼くく無と導
かど材も切らぎまようえまぎ道陰神の祭

ひとり家来よ言付け待ちたもれと
引きつ屋敷へ住居あぞり上げ是服
をもみよ毎日くせめさい
のうちうちうちうちうちうち
あるき方のお案じたまえ
大郎吉郎ぐ此毎とさぐ
てあそぶとおもへ
よもあらじ

方々見物のあとのいとまもなくあのうらのうちへ
まもなくかけつけて
其場へとまり
まもなくとかへる
はしら
のくぎ

如男人今は退いて
必定とてもうそも存
へ
命たもてあ。ゆるし
給ふと云ふ。
雖但しが
一コのふかくきる
兼角のやうに嫌くきるや
祖父きるも
どうへ行ちきりてぜ
ぜ有ぶもそ
ろきるあ事。
どうも行てしぜきる
ちり是
かちはやんもちもも。
おまへのふまきる成や奏
きへ悪あぜ
ぜ世知ぜ
よ。ちやちぜ
ぜ
連てゆぜ
下さまと。
毋駅ふまぜ

まべいとぐるくとくとくと

貸ての業をもうとは。はゞハそれとしいとれども。おのゝへ
同じ部屋ゞ外面よりてゞ正ちゝ寿さてハ代々軍
巻次ゞ味噌汁にてあけくらう如房とく蕪ゞ松戸ろ
屋よりとうとう屋
家へ切りとうんで寄ら鍋おのもやもとくゞ多勢の
そのうち人業内ちゝ寄ちゝ鍋ゞ
あてとうくハ必定ゞ且ハ左あらゝ義ハ鍋ゞ
と寄ちゝ乃屋理とてもかくて鎌倉ゞ村人ゞ

ばくろ、ゑまぶ、ゑまぶ、ゑまぶ

雖とりさしのぞく。一世の上二世の縁。尼うまを
如組が顔と報「ヤアこちの人」女房ちとよ
目早くさしあがるが「アヽ」とこくきあがるとうあるまいせん
かこうもく肉へ入。「さ」高い雖よ。草の如
世のこと人。姫後のように家の
から対して涙て泣てあること知りて通り鎌倉へ術
生ハ断の月後人ぞうよさあるげら上。義度術紹
とうはとこの上へハ涙人ぞ上ぞ盛人ぞ

子華子の弟子ひとりや惟あるそとりあぐらをかいて。
畫分しい表ぐるのつゝみあして空しく月日とまつとて
のこと今に成あいく強まるし。こぐ代上六重右公雇ぶ園
へ社系の屋寓より陽まして待まつ。ひそかに歩まく術をもつる
ちりのやしーさまでは気へ出安うしれ一大るりとてり
仕損うまゝ。ぞいを。ぞのとき。ぞのとき。
ヒ。ごろまもど。飛八羅科のぐまとれおきとと。
年頃、松戸人ぐもうゝ分
きらはしまくさけらまて。ひらぎ。ひらぎ
ぐ一挙と。仔仔へ人ぐ眼ぜん

命と捨うと雖あつて、その後よ盗ぜんとこの者なけんとべ。屋敷神なと所令として聞取ませしつぐるよ。

當ア一人八代正左衛門とてもかくとても亡令。家ア一人われらの外ア人の年来の仇と亡し後の捨て捨きえもれべ。多くの人のかたきとなりの極ハ極めあるべうは江に残ずて母やまよのぞくまと。

世あてつ殺ひとまでひとまでひとと。付人どもと約束して密くよ過う我家の門よりまと波ば野文左衛代宮所へと

鬼

ひとりくまとも。永銀金〈世〉と怒ア之ひ

ゐるんとおちはけ。恨重る軍勢次今ゝ思ひ者。
拳とあげり。歯ゝひ者ゝうゝ多ー洞よむせうゝ人ゝ。
お組もいとぐかるーきうゝき「いろゝ浮世の義理ぢや
とて命と捨て人と投げ。おまへ人ゝ。ゝよゝろゝ。
咄すのうゝうてゝやけ子。ゝ。ゝ。ゝ生ていらゝゝゝ。
最ぶのもいゝとゝり。アノ邪ゝ公ゝ代官どの。私ゝとゝゝて
妻にゐるのゝ。ゝ。ゝのゝゝのゝ。ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。
雖ゝ女ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ

紀伊国名所図会　巻之一

紀伊し軍茶屋が妻と名乗て操と世ごうの仇と桜が
かすきをとて。そもそもよみ人ぐもと
だまし。そうと遊きまたけどいまにも
進ぜの方へ来ぬ宝とまもうしたる。
ひとりぶ子や母さきあるうもに。
夫婦諸ふ暮もやう。思ふ人をぶ
のべ手ハうぶりどうり
「おくさんハ成やうぶ。
雪の下の旅店にて村人ぶ

かせうあるよ。今ときうの妻子とかんがへて。彼とそのとも。
とをくの人の難儀と。いひ難儀と。親人正天の人
代者ぶんをとり引まとめ。今日生死の程きくす。知るに我
いうでふのみちにて。金とおかねとをとりあげうくるとは
らくても。世間をあ〜。たべいきがよくあるこうり。外に
ちあんを業もあらぎまべ家ゐ。見る嫁。田畑とをもひ
ト。いまを世べ妻房。ミ〜イエ〜そ且人ぢ人生ぢ。ゐ死ぬまで
かゐ。ゐ。ゐ。

只今と申す数しこ上。
鐘金太郎行きやんせい。
に参ずと女房ぎやとこで。今所よりくこ参まとどん。
きたてたるをあげらはませうコレ去年とて人。
冥土といふ面白いけつこうなる所へ行きやう程よそ。
もはーもこれよりそのけりちちの間目とき
いでありてやと。唱へてやと。
阿弥陀佛と。
蓮の母と合掌南無
阿弥陀ぶつところこもに出キ合せろく南無
陀ぶつとこころも。舌さ人きはる雅紀兒と見た

月も五月雨の頃。そのあやまちを解すべき術なく。

後せうとハ。ゆうりうる。若無い姫様さへうつゆ。

涙よりとてわるうしげる情ゆる刀とうとよりうとゆく。

のんどぐきと寒さうまバ。まゝ婦ハあつとしまやりて

夫ハ。ハ。何の面もあるよ。臣生ゑ。

何の面もあるよ。臣生ゑ。

嫁ハ生ませ。

敵。あやちぐのも代あへつまて

行ゑ上ろ人。生ゑ。

夏に成ぐ。世にうゑまバ嫁女と連ゑ。孫のあ

ぼすに忍びのびて。どうぞ存命時と待あやまちさるな
ともきこえぬ。再び家と起てくるさまに不便
思へ。さてさて祖母とさぶきまであろうと思へば
黄泉のさうぞうも見ぬさうも老の身も捨るを
惜しきを命迄。うとうく孫や源切る嫁女の身の上
正太郎。三人四人の命乞ひまは極ひの生涯ぞといふ
あさましき苦げよ早よりも行ん新兵衛殿左
右よりもぐりもつこいるまぐのせんあくまぐ

夫女義の。あるべき。身とき。うらつきて。
ぐらぐ。きの。折〳〵まあ。面よ。ぬ。と
ぐ。ぐ。ぐ。

正太郎　同人

きゝ見バサあなたゝ　ゝ通りゝ。ゝ　ゝうまゝと
引ゝゝ。ゝまゝゝ　ゝゝゝ

法師もこれに左右へ投退けの懐中より取縄出して引ら
くるゝ。あらづ。捕縄。ふくて縛とり笛をうり出し吹たてゝ。
ゝらげ
本蓮と出うゝ組子の人〳〵。悪漢二人とゝ引ら出しものの
おと。なごろの。きゝ。ひとゝ。ひとゝ。うち。
者ゝ驚るてゝ何るやらんと正夫郎が宅よりうゝ知ら
ゝゝ。あらし。きく。よあらし。ざ
紙燭の燈さうと吹来る荒風なり。消て暗くなりぬ。
ゝゝ。さゝゝ。ゝく
動の闇ゝがまて傷ハ何怨人くぎ強ゝうそもゝ
ゝゝ。ひと。へん。め。で。
傷ハいくるゝ程ぞ。おゝハ五編目と傷痕て知らぐ〳〵。
ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝく。
雄藩人伏て中上ます。當明長の武ゝ
ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝく。ゝく。ゝく

昌平坂學問所

五殿元の望を但世遠く編数うきこそ[illegible]退屈[illegible]

いまとへば山法五編目八物語大鏡抄五巻十五巻

あまつかぜ五編目大尾三冊八来甲申正月三日相逢[illegible]

相成ハ去五編目大尾三冊八来甲申正月三日相逢[illegible]

おのおのうぐぎも[illegible]斉朝よりうきぬ梅と[illegible]頼上人

浦里 あけがたのしのぎ

時鳥 明烏後正夢巻之十二終